

す。この画面の後ろには30以上のデータベースが隠れています。資源共有化システムにある検索語を入れると、30以上のデータベースを同時に検索し、その検索語に関連する地図や映画や論文に関する情報を提示します。アチェにおいても、メタデータの異なるデータベースが混在している場合には、この方法が使えるのではないかと考えます。

### ■ 標準メタデータを探し、 組み合わせでデータベースを構築する

ここから先は「こうしたほうが良いだろう」と考えている事柄を短く紹介します。情報の世界は動きが激しいので、「これが正しい」方向と断定することはできません。当面考えられるベターな方向性はこれではないか、という話です。技術な話はしません。

繰り返しになりますが、データベースの寿命が短いのは、勝手なメタデータを使っているためにデータベースの使い勝手が悪いためでした。そうであるならば、既に作成されていて、しかも広く使われているメタデータを皆で使えば良いのではないかということになります。そのようなメタデータを標準メタデータと呼ぶことがあります。

世の中にはたくさんの標準メタデータがあります。本、写真データ、地理データなど、それぞれの分野やメディアごとに様々な標準が用意されています。これは

### 資料10-7 標準メタデータ——語彙の共有

**Trend Dunia: Datalink di atas jaringan network**  
世界の趨勢はネットワーク上でのデータリンクと高度利用  
そのためには語彙と記述法の標準化が必須  
標準メタデータの利用は重要

**Dublin Core**  
WWW上におけるリソースに関する情報を記述：  
<http://dublincore.org/>

**MODS(Metadata Object Description Schema)**  
簡略版XML ベースMARC21：  
<http://www.loc.gov/standards/mods/>

**EAD(Encoded Archival Definition)**  
アーカイブズ用メタデータ：<http://www.loc.gov/ead/>

**GML(Geography Markup Language)**  
空間データや位置情報を含む各種のコンテンツを記述：ISO  
19136:2007

**語彙のレポジトリ**  
Meta Bridge: 総務省「新ICT活用サービス創出支援事業」の一つ  
<http://www.metabridge.jp/infolib/metabridge/menu/>  
WordNet <http://wordnet.princeton.edu/>

そのような標準の極々一部にすぎません。ですから、データベースを作る際に最初にすべきことは、既に存在している標準で使えるものがないかを調べることです。

もし、ある標準のなかに欲しいデータ要素がなかった場合でも、別の標準の中に使えるものがあれば、それらの標準を組みあわせる方法があります。これをアプリケーションプロファイルと呼び、メタデータの最新の使い方となっています。このような技術を駆使す

## シンポジウム/ワークショップに参加して

### アチェ震災情報のデジタル化と共有化

原 正一郎

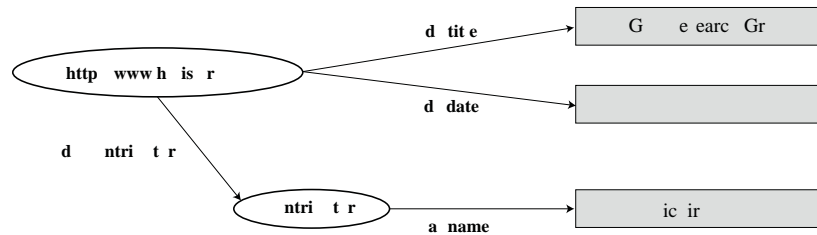
今回の国際ワークショップにおける一番の印象は、日本語とインドネシア語によるバイリンガルの討論であった。従来の国際ワークショップ、とりわけ理工系の場合には英語が基本である。多くの国や地域から研究者が集まるので致し方ないことではあるが、自分自身を含めて語学スキルがそれほど高くないものどうしでは、微に入り細にわたる意見交換が困難で、もどかしい思いをしたことが多い。日本語とインドネシア語によるバイリンガルな討論が成り立つためには、インドネシア語が堪能な上に関連する学術知識の豊富な通訳の存在が欠かせない。今回は西准教授がその役割を果たしたわけであるが、地域に根を下ろし現地語を駆使して研究を行うという地

域研究の底力の一端を垣間見た思いであった。

さて今回はワークショップの合間を縫って、文書館や博物館などを見学する機会があった。国立公文書館アチェ州分室では津波により多くの史資料が流出・水損していた。水損史資料については日本を含む外国の修復保存専門家による救助活動が展開されたと聞いたが、どれだけの史資料が失われ、どれだけが修復されたのかはわからなかった。現在、ここには津波災害に関する行政文書が集積されており、目録化が進められている。残念ながら、集積された文書量に比べるとアーキビストの人数が少ないためか、目録作成作業の進み具合はそれほど速くはない印象を受けた。個人的には、どのようなメタデー

es r e es ripti n ramework r

- より柔軟なデータ連係を実現する機会に理解可能な情報の記述
- ✓ ri e ec re ica e ec
- ✓ ( i e ary) などで利用されている
- ✓ e 上のあらゆる情報資源を記述する (Lin e a a)
- ✓ コンピュータのよる推論の実現を目指す ( c e a L等)



資料10-8 Resource Description Framework(RDF):Mendiskripsi data meta——メタデータの記述

ることで、異なるデータベースをネットワーク上で繋げることが可能になります。

■ 柔軟なデータ連携を実現する RDFデータの可能性

資料10-8はRDFというセマンティックWeb技術を簡単に説明した図です。技術的な説明は省きますが、従来のデータベースなどよりも柔軟なデータ連係を実現する手法として注目されており、今後の基盤技術となる可能性が高いと考えています。

この図は世界中で共有されているRDFデータの数です。2011年9月の段階ですが、310億タプルが繋がっ

ています。ある意味で知識の膨大な集積ということが出来ます。将来、アチェの重要なデータもこのようなRDFの形に変換することにより、世界中のほかの災害データとの統合に貢献できるのではないかと期待しています。

タや記述ルールを採用しているのかに興味があったが、短時間の訪問であったので詳しく聞くことはできなかった。ただしジャカルタのアーカイブ専門家や日本の国立公文書館などの支援を受けているようなので、標準メタデータに則した目録が作成されている可能性がある。データベース共有化への可能性に期待している。

津波博物館には、地震や津波の発生メカニズムなどの解説や地震体験装置など、地震および津波災害に関する教育的展示は一通り用意されていたが、充実しているという印象にはほど遠かった。予算不足が主な理由と思われるが、それ以外にモノ資料の収集が進んでいるのか、所有権などの権利問題は解決しているのか、調査・整理が追いついているのかなどの疑問を持ったが詳細はわからなかった。阪神・淡路大震災の史資料管理に多少とも関与した立場からは、災害関連のモノ資料の展示が今度どのように展開される予定なのか、写真や動画や音声資料の収集・保存状況はどのようになっているのか、それらの整理手法やメタデータはどのようになっているのかに一番の関心があったが、見学のみで担当者に尋ねる時間がなかったのは少々残念であった。

今回のワークショップのテーマの一つは震災情報のデジタル化と共有化であった。ワークショップにおける発表や短時間であったが何力所かの施設訪問を通じ、多くの情報がデジタル化されたものの収集や共有化は進まなかったとの印象を受けた。震災直後から中央政府、各国政府、NGO、NPOなどによる様々な専門的援助活動が実施されたと聞いているが、情報収集・管理についてどのような組織がどのように連携して活動していたのかは不明であり、今後の震災情報の組織化を考える上でも検証する必要があると感じた次第である。